身近な木が燃料だった昔の生活

■資料番号57（身近な木が燃料だった昔の生活）

【自然を生かした昔の住まい・暮らし】

【ねらい】エネルギーをあまり使わず、自然を生かしていた身近な香川での昔の住まいや生活を振り返ることにより、昔の人々の様々な智恵や工夫を学ぶとともに、それらを現代の私たちの住まいや生活に生かし、限りあるエネルギーをいかに効率よく使っていくかを考えさせます。

身近な木が燃料だった昔の生活

※資料60（省エネ住宅）と関連付けて使用することで、現代の省エネ住宅に生かされる昔の暮らし方に気づくことができます。

また、資料68（間伐材の温泉利用）と関連付けて使用することで、資源やエネルギーの有効利用に向けた現代の取り組みに生かされる昔の暮らし方に気づくことができます。

【資料解説】

この写真は、県内の民家で実際に使われているかまどを撮影したものです。かまどの中では、木が燃えているようすが分かります。

●昔の生活の燃料のほとんどが木だった

かまどでの調理のほか風呂炊き、暖房も兼ねた囲炉裏など、昔の生活の燃料のほとんどは木であったため、多くの人が近くの山や雑木林に入り、低木を刈ったり、枯れ木を拾ったりして、木材を利用することで、山も自然と手入れがされていました。

しかし、木が中心の生活は、薪（たきぎ）の調達や薪（まき）割りなどの手間から、より手軽な電気や灯油などに代わってしまいます。ガスコンロ、さらには電気炊飯器、IH調理器、電子レンジなど、より便利な調理器が利用される中で、かまどは姿を消し、木を使う機会もほとんどなくなってしまいました。（人が入らなくなった山は、おのずと荒廃していきました。）

●持続可能なエネルギーとして見直される木材

ところが、現在、木材は、地球温暖化防止や循環型社会づくりにもつながる持続可能なバイオマスエネルギーとして見直されつつあります。木を燃やせば、二酸化炭素は発生しますが、その二酸化炭素は、もともと大気中にあったものを木が成長過程で光合成により吸収したものなので、燃やしても、二酸化炭素が増えたことになりません。（資料33参照）

●薪（まき）ストーブやペレットストーブを取り入れる省エネ住宅、薪（まき）を利用する温泉宿泊施設

現代の省エネ住宅の中には、薪ストーブやペレットストーブを取り入れているところがあります。（資料60参照）それは、日本の国土の２／３を占める森林資源の有効利用の側面や二酸化炭素を増やさないというメリットがあるからです。

また、県内には、温泉を沸かす燃料を重油から薪（まき）に代えることで、重油と比べて二酸化炭素の排出を大幅に抑えている温泉宿泊施設もあります。（資料68、73参照）

参考：教科学習におけるエネルギー環境教育の授業づくり（国土社）

【関連する各教科の学習内容】

	小３	小４	小５	小６	中１	中２	中３
社会	○地域の人々の生活				【地理】 ○世界と比べた日本の地域的特色（資源・エネルギーと産業）		【公民】 ○私たちと国際社会の諸課題(地球環境、資源・エネルギー問題) ○私たちと国際社会の諸課題(よりよい社会を目指して)
理科				○燃焼の仕組み			
技術・家庭(技術)					C　生物育成に関する技術　○生物の育成環境と育成技術		
家庭 技術・家庭(家庭)			○快適な住まい方 ○環境に配慮した生活の工夫		○住生活の工夫 ○家庭生活と環境		

【参考】燃やした後も有効利用

かまどで木を燃やした後の灰は、田畑の肥料にも使用していました。自然から得たものを利用し、使い終わったら自然へ返す。ここにも、昔の人々の生活の知恵を学ぶことができます。